なり経営危機が表面化してきた。チェスコムの場合は新規事業が軌道に乗らないうちに転送電話サービスが振るわなくなったため，子会社の分離を余儀なくされたケースだ。今後，こうした急成長企業は販売不振が引き金となり，それまで先行投資してきたツケが回ってくると予想される。チェスコムのような資本提携や業務提携による生き残り戦略は，ベンチャー企業存続の有効手段として先行き増加することは間違いないだろう。

愛と知性のバルセロナ

—1992年オリンピック—

ソウル後の1992年オリンピックの開催地がスペインのバルセロナに決まった。

バルセロナを予言していたのが、占師の竹村亜希子さん。彼女は日本カタルーニヤ友好親善協会理事の肩書の持ち主。占いの玉手箱の主宰者として知られ、スペインのカタルーニャ地方に伝わる「サン・ジョルディの日」を日本に紹介、原動力的な役割を果たした人。

サン・ジョルディの日、といってもまだ、日本では何の日かわからない。そこでちょっと紹介するとカタルーニャ地方には守護神サン・ジョルディをたたえ、その日に男性は女性に「花」を女性は男性に「本」を贈って、愛と知性のシンボルを交歓しあう習慣がある。

竹村さんは愛のコミュニケーションをぜひ日本でも習慣づけたいと、今年はじめて日本に紹介した。その日は、4月23日である。

聖バレンタインデーのように商業趣味と結びつけば日本でも普及する可能性はある。

この竹村さんに会ってきた。サン・ジョルディの件ではない。「経済と占い」という奇妙なとりあわせをテーマにいろいろお話をうかがった。（評報は12月3日号、帝国タイムスでお読みいただきたい）

竹村さんはバルセロナのオリンピックをとうに予言し同地方を印象づけるサン・ジョルディの日の紹介を思いたったのではないだろうか。これは推測にすぎないがスペインのカタルーニャにほれこんだ彼女の自信に満ちた話しっぷりにみじんの迷いのなさが印象的であった。

竹村さんは予言する。21世紀、ヨーロッパは復活し、日本がそれに続きアメリカは老兵のように消え去ると…。

神秘、新鮮、芸術、文化、愛と美…、これが竹村さんのスペイン印象。日本でもスペインブームが静かに起こっている。スペイン、とくにカタルーニャ地方を知る手がかりを次にあげよう。

ピカソ、ダリ、カザルス（今世紀最大のチェリスト）、アントニオ・ガウディ（建築家）を輩出した。鉄鋼、織物、化学などスペインの中心的工業地域である。